

札幌農学校と欧米中心主義的文明論——内村鑑三の思想形成について——

ロバート・クラフト

はじめに

めには、クエンティン・スキナー (Quentin Skinner) の手法^①に学んで当時の言語的背景 (linguistic context) を問うことが重要な課題であると思われるが、人類文明にかかわる「日本の天職」論を、文明をめぐるディスカールのなかの発話とみることができるとすれば、特に同時代の文明論における言葉の用法が分析されるべきであろう。

キリスト教思想家として知られている内村鑑三(一八六一―一九三〇)は、一八九二年二月六日に「Japan's Future as Conceived by a Japanese」と題する英語論文を『The Japan Weekly Mail』に発表し(同年四月一五日に邦訳「日本國の天職」が『六合雜誌』第二三六号に掲載)、人類文明の発展に寄与する「日本の天職」を唱えた。同じ考え方は一八九四年に出た『地理学考』でも展開された。日本人は世界に対して日本固有の性格を以て日本人にしかできない貢献を果たすべきだという発話の目的が何だったのかを説明するた

一九世紀の欧米においては、西洋と非西洋が二極対立的に捉えられ、「文明」と「進歩」がほとんどもっぱら前者のみに属するものとされた^②。東洋のある部分が西洋諸国よりも早く比較的の高い文明のレベルに達したことを否定しなくても、過去に出来上がったこの文明に、東洋はそれ以降とどまっており、さらなる進歩を見せていないとされた。

明治初期の日本に関しては、福沢諭吉の『文明論之概略』(とその前後の福沢の著作)を福沢による西洋の文明論からの独立の企てとみる見解もあるが、大体において西洋文明を日本に定着させようとした明六社同人などの思想家たちは、以上の言葉の用法をほぼそのまま自己の文章に採り入れた。そのため、日本における文明をめぐるディスクリのなかに、日本人が自分のことを西洋人より下のものとして考える欧米中心主義的文明論に基づく他律的な自己理解の傾向が見られる。

なお、『明六雑誌』の文庫版(山室信一・中野目徹校注、岩波書店、一九九九―二〇〇九年)が出されて以降、明六社に携わっていた人物をはじめとして明治初期の思想世界を問う直す研究が進んでおり、そのなかで西洋思想の相対化もなされてきている。例えば、儒者を主人公とし、漢文脈(と国文脈)の重要性を示す『明六雑誌』についての研究書があるし、徳川末期から明治初期にかけて西洋人文社会科学の知識が日本に流入する過程でオランダ経由の学術知識が果たした役割を問う研究でも、日本の知識人たちが西洋の制度や学術などを直輸入するのみならず、それに積極的に取り組み、それを主体的に捉え直し、そしてその思想的格闘に儒学などの思想的伝統も働いていたことが明らかにされている。⁵⁾ 本稿で問題として扱う欧米中心主義的文明論は当

時の文明をめぐるディスクリにおける一つの傾向なのである。しかし、明治初年代にあらゆる面で近代化/文明化⇨西洋化の担い手になった世代に限らず、そのなかで育つていく内村鑑三の世代にとっても、欧米中心主義的文明論とそれへの対応が困難な思想課題になったと思われる。

では、内村は「日本の天職」を発想する前まで、どのように以上の課題に突き当たったのであろうか。高崎英学校⇨有馬私学校英学科⇨東京外国語学校英語科⇨東京英語学校⇨東京大学予備門⇨札幌農学校⇨米留留学という西洋的と言つてよい学歴を持つ彼には、欧米中心主義的文明論に接する機会がいろいろあつたと考えられる。そのなかの札幌農学校の役割について、以下で考えていきたい。⁶⁾

一 札幌農学校の外国人教師たちの文明観

周知の通り、明治政府は欧化政策を取り、維新後二十数年の間に法律・政治・軍事・産業・社会・衣食住の生活などを早急に西洋風に改新することによって、欧米列強に文明国として認められるような近代国家を建設し、不平等条約の改正交渉に入ることを目指した。これは他ならぬ文明をめぐるディスクリのマテリアルな現実であり、内村鑑三が一八七七年に第二期生として入学した札幌農学校

もその現実の一部分とみることができるといえる。アメリカのマサチューセッツ農科大学をモデルとして一八七六年に開校されたこの学校は、授業がアメリカ人の教師によって英語で行なわれたのみならず、衣食住まで生徒の生活が全面的に西洋化されていたのである。「日本の国内とはいふものの、ここ札幌農学校の中の空間だけは、あたかもニューイングランドの一部を切り取って当てはめたような、西洋的空間が出現していた」とされる。

なお、西洋化は形式にとどまらなかった。内村鑑三が入学したころ、キリスト教への入信を促す風潮が強かったし、また教師がお雇い外国人だっただけに、教育自体も西洋風のものであった。ここで特に興味深いのは農学校の第二代教頭ウィリアム・ホイラー (William Wheeler) による日本の教育に関する発言である。『札幌農養第二年報』におけるホイラーの書いた「年報」で、彼は、日本人生徒が欧米の生徒よりも学習の機敏さを見せるにもかかわらず、卒業後となるべく「they have almost invariably fallen behind the heirs of that practical, progressive, self-asserting spirit which has been the impulse and the fruit of western civilization / 其進歩必ス泰西文明ノ振気及ヒ結果タル着実、進取、自決ノ精神ヲ受ケ継タル欧米人ニ後ル、ナリ」⁸ という所見を取り上げ、その理由について次のよ

うに論じる。

日本人はかねてより、すべての知識の源泉として、同じく「魯鈍」である中国 (equally inert China) の古典に崇敬してまで頼り、それを超えることができなかった。わずかの美術は驚くべきほどの完全さにまで達したが、計画や発明の実用は無視された。こうして、日本の古来の学問は広大ながらも遅鈍であり、記憶力のみを養成し、思考力を度外視してしまった。しかし、記憶は模倣的 (imitative) なものであり、創造的思想こそ進歩的 (progressive / 前進物) なのである。要するに、日本の従来の教育では進歩が不可能ということになるが、そこでホイラーは、西洋で行なわれるような科学的実用的教育の導入を勧める⁹。

札幌での在職期間がすでに終わった後に農商務省大書記官・鈴木大亮に宛てた書簡で、ホイラーは日本が講じている進歩的な処置 (progressive measures) への関心を失っていないと記しているが、もちろんこれが明治政府による欧化政策を指していることから、ホイラーが西洋化を進歩と考えていたと言っても間違いはないと思われる。

上述のごとき考え方には欧米中心主義的文明論の傾向が認められるだろう。なお、ホイラーの場合のみではない。教頭として彼の前任者であったウィリアム・スミス・クラーク (William Smith Clark) もさうであった。クラークは

札幌に着いた直後にその義弟に宛てた書簡で、日本で受けている優遇について語り、日本人生徒の英語力も褒めているが、日本人のことを東洋人 (Orientals) と呼び、半野蛮 (semi-barbarous people) とする箇所も目にとまる。¹¹⁾

さらに、別の書簡で彼は、農学校における聖書の使用に關する開拓長官・黒田清隆との対話のことを報告している。それによると、クラークは、聖書はもつとも優れた書物であり、すべての開化した国々と同じく (as in all other enlightened countries) 日本にもきこころから導入されるに違いないので、札幌農学校での使用を許可すれば評価されるだろうと言ったと書かれているが、それが事実だとすれば、西洋人としてキリスト教を文明と結び付けることによつて、聖書使用の許可を得ようとしたことになる。¹²⁾

なお、このような論法は決してクラークに限った論法ではなかった。札幌農学校開校以前のことだが、一八七二年に開拓使は仮学校を開校し (一八七三年に閉鎖と改正を経て再び開校)、そのなかに女学校も設立した。いずれも卒業後の長年にわたる開拓使への奉職を義務としていた。¹³⁾ この制度を改正するよう、一八七二年に開拓使に雇用されたアメリカ人鉱山学者ベンジャミン・スミス・ライマン (Benjamin Smith Lyman) は黒田に請願した。請願書のなかで、男女両性のための学校設立を “enlightened policy” と評価したう

え、ライマンは、未成年者に課した義務が成年後も長く続くことを、“enlightened” になろうとして批判している。また、アメリカやフランスの状況に触れながら、個人の自由を重視することこそ政府の “enlightenment” を示すとし、日本もそれが実現できたら、治外法権の排除にも繋がると、不平等条約の問題にさえ論及している。¹⁵⁾ 最後に、日本は、せめて北海道のことに關して、世界のもつとも開化した国々 (the most enlightened countries of the world) と比べられるぐらい正義や寛容が実現されるまで、賁下は満足しないだろう、という言葉で請願書を結ぶ。¹⁶⁾ ここで指す国々が西洋諸国であることは言うまでもない。

上述のように、開拓使のお雇い外国人は、自国が日本より進歩しているという意識を持ち、必要に応じてそれを露骨に表すこともあった。当然、札幌農学校の生徒たちもこうした文明観に接することになった。例えば、第一期生の卒業式のときに、教師デビッド・ピアース・ペンハロー (David Pearce Penhalow) はスピーチし、そのなか、日本は古い国ではあるが、世界のもつとも進んでいる国々 (the most advanced nations of the world) との交渉に入ったのはごく最近のことであり、日本のこれからの進歩と発達はあなた方にさまざまな好機を提供するに違いないと述べたとさ

れている。¹⁷ここもまた、「世界のもつとも進んでいる国々」はもちろん欧米のことをいう。このスピーチを生徒たちも聴いた。

似たような発言は教師ウィリアム・ペン・ブルックス (William Penn Brooks) が一八八八年に準備した卒業生への送別の辞の草稿にも見つかる。また、去る四半世紀に遂げてきた進歩を評価しながら、ブルックスは、日本における西洋文明はまだまだレベルが低いと言い、さらなる発達の可能性を指摘している。¹⁸

二 授業における文明論

授業でも欧米中心主義的文明論に接する機会があったと思われる。農学校として理工系の科目がメインだったが、文系の授業もあった。第一期生、第二期生、第三期生の受講ノートからは、ブルックスが各クラスの農学講義でも野蛮 (savage, barbaric) と文明 (civilized) を区別し、国の農業の状況はその国の開化の度合いを表す確かな指標だと述べたことが分かり、ブルックス自身が西洋の農学を教えるために日本に来ていることを考えれば、文明論の観点から興味深い発言だが、それよりも生徒たちの文明観に働きかける場として大事なのは歴史の授業であつたらう。

『札幌農学校第四年報』における教師ジョン・クラレンス・カッター (John Clarence Cutler) の「生理学・比較解剖学及英文学科報告」によれば、同学科で一八七八年の後半から七九年の前半まで第三年級を対象として、紀元後の歴史における著名な人物と事件について講義し、その目的が第一に復習、第二にヨーロッパ大陸の風習や事件の英国史と英文学への影響を示すこと、第三に理系の科目で用いられない語彙の練習にあつたという。さらに一八七九年の後半には第四年級を対象として“History of civilization”の授業を行ない、欧州の歴史と発達に見える文明の事実を概観したという。²⁰

この二つの授業を受けた生徒の一人は内田瀨であり、彼の受講ノートが現在北海道博物館に所蔵されている。歴史講義のノートもそのなかに入っているが、どちらの授業のものであるかと言えば、内表紙に“Oct. 7th 1878”と表示されていることと、一世紀の古代ローマから一八世紀のフランス革命に至るまでの歴史を、体系的な文明史というより際立った人物を中心とする年代順の政治史として語る内容から、「文明史」でないほうの授業のノートであることが明らかである。

それでも、はじめに、一九世紀が発明の世紀であり、それより以前のすべての世紀の共通点がその成立に貢献した

ことにあると言い、また、トゥール・ポワティエ間の戦い(七三二年)を東洋と西洋の戦い、キリスト教とマホメット教の戦いとして紹介し、人類の知的向上と市民社会の自由(the intellectual improvement, and the civil freedom of the human race)が争われたと述べており、カタラウヌムの戦い(四五年)を、欧州がカルムツク人の王朝に治められていくか、ゴート・テュートン王の下で自由に進歩(free progress)していくかが決まる戦いと意義付けている。

このような箇所から、西洋史上の諸事件を順に概述する講義でも、「進歩」の概念を前提としていたことが推測される。興味深いことには、十字軍は「西洋の暗闇に、より豊かで進んでいる東洋文明の光明と長所を取り入れた」(“It introduced to the darkness of the West, the lights and advantages of the richer and more advanced civilization of the Orient.”)というように、東洋のことをポジティブに論じる箇所もあるが、あくまで西洋の進歩の観点からである。また、中世のことを指しているので、一九世紀の西洋がすでにその暗い過去の状態から脱却し、世界の文明をリードするようになっていくという文明観とは矛盾していない。

では「文明史」という科目名がついている授業はどのようなものだったのであろうか。講義ノートまたは受講ノートが見つかからない限り、「文明史」が具体的にどのようなように

紹介されたかは不明だが、『札幌農学校第四年報』に載っている試験問題を見れば、やはり欧州史に関するものであることが分かる。そこから、当時の文明論らしく「文明史」を「西洋史」として論じたことが推測される。

さらに、『札幌農学校第五年報』における教師ジェームス・サマーズ(James Sumners)の「英語科報告」によれば、第一年級生の読書力を上達させるために、“Lord’s Modern History of Europe”をテキストとして授業を行なったという。『札幌農学校第二二年報』における書籍目録には“Lord, J. Modern Europe, 42 copies.”という記載があり、北海道大学附属図書館の札幌農学校文庫にはジョン・ロード(John Lord)の*Modern Europe, A School History*があるが、サマーズが授業に使ったのはこの本だと思われる。人々の自由、平等、知識の普及、富・名誉・権力を取得する可能性などが進歩を測る規準としたうえで、この規準にしたがって一五世紀から一九世紀に至るまでの欧州史を紹介する歴史教科書である。サマーズがどの箇所を生徒に読ませたかは分からないが、欧米中心主義的文明観の特色を帯びた表現が見られる。例えばロードは、ヨーロッパ人による発見以前のアメリカ大陸を野蛮(a continent once inhabited by ignorant and untutored savages)としているうえに、この発見の結果として日本や中国なども欧州の影響下に入り、文明

とキリスト教が世界のもつとも遠いところにまで到達した (the extension of civilization and Christianity to the utmost bounds of the earth) としう。⁽³⁰⁾ ちなみに、内村鑑三はサマーズの授業を受けていないが、彼もロードの本を読んだことは本人の言によって知られている。⁽³¹⁾

三 『農業叢談』と西洋文明の導入

農学校の生徒は文明論の受け手のみならず、早くも在学中に送り手にもなったと言える。一八七八年に農学校から、「農校生徒ヲシテ毎月一廻新聞紙発行、農家ノ裨益ヲ得セシメ度旨」の申し出があり、まずは試みに数カ月にわたり『農校報告書』と題する月刊の小冊子を発刊したい旨を出願した。これは後に『農業叢談』と改題されるいわば農業雑誌であったが、その構想を教師ペンハローは願書の別紙で次のように述べた。北海道の農家および一般人民に農学校の事業により裨益し、また彼らに農学校の役割を知らせることが小冊子発行の目的であり、そのうえ、この事業を担当させることによって生徒らの勉強にもなるという。農業社会を益する事業とはもちろん知識を提供することだが、生徒が「農業及び製造社会ヲ直接ニ裨益スベキカ如キノ条款ヲ外国新聞ヨリ抄訳シ、或ハ自己ノ心思ヨリ之ヲ作り、

又ハ覺員ノ寄書ヲ登録」することをペンハローは予定していた。⁽³²⁾

外国新聞からの抄訳なり、農学校で訓練を受けた生徒の作文なり、いずれも西洋の農学知識の普及につながった。『農業叢談』第一号の冒頭に置かれている「農業叢談刊行の旨意」という文章は次の言葉で始まる。

今や文化年に開け、百工日に新を競ふの秋に際し、独り農家に於ては依然旧習を墨守し、其改進する所を見ず。故に勞する所多くして得る所少なく、稼穡常に艱難にして粒々皆辛苦たるを免れず。豈歎せざるべけんや。夫れ欧米諸国に於ては農学も亦他の諸學術と并ひ行はるゝを以て造化の大法を究め、識者の經驗を鑑み、機械以て人力を省き、肥培以て收穫を増す等、其方法の直ちに我邦に施行すべきもの一にして足らざるなり。⁽³³⁾

ここでなされている時局の観察はまさに『農業叢談』発行の背景であり、同誌の性格を予告している。つまり、日本の農業は時代遅れであり効率が悪いため、より進んでいる欧米の知識や技術の導入によって進歩させる必要がある。その案内をすることこそ『農業叢談』の課題なのである。このように、同誌は農業史研究の重要な史料であるのと同じに、当時の文明論の状況を再現するための素材にもなる。現在、『農業叢談』第一号と第十七号⁽³⁴⁾は製本されて一冊の

状態で北海道大学文書館で所蔵されている。以下ではいくつかの掲載記事を紹介し、文明論の観点から分析することにした。

『農業叢談』は毎号二本から八本の文章が載っており、分載されたものを一本として数えると、全一七号で五四本の文章になる。執筆者が分かるものはすべて札幌農学校の生徒あるいは卒業生（四〇本）または教師（二本）によって書かれている。一〇本は西洋の文章からの（部分的な）翻訳だが、原文の表示を欠いているか、もしくは曖昧な情報にとどまる場合がある。

上述のごとく、『農業叢談』には農業の近代化という課題があったが、農学校の生徒たちはそれを意識しながら記事執筆しようである。例えば、第三期生の梅野四男吉は「種子を薄く蒔くへき事」と題する文章で欧米人の言を引用しながら、植物が互いに邪魔せず、丈夫に生長できるように適量の種を蒔くべきことを説いており、「頑固に種蒔の旧法を守らないよう戒め、土地の性質や気候などを考慮する必要を主張している。そのために西洋の調査結果も参考に挙げている（第二号、一八八〇年二月、三丁裏～八丁裏）。

もつとはつきりと西洋化による近代化の必要性を表明しているのは第一期生の佐藤昌介による論文「開墾地の区画及び其取扱方を論ず」である。内容は題名通り土地の使用

目的による区分およびそれぞれの扱い方についてだが、北海道に移住してくる農家に西洋の農業方法の長所をもって日本の旧法の短所を補って欲しいという希望が冒頭に記されている（第四号、一八八〇年四月、一丁表）。

佐藤は札幌農学校を卒業後、「貿易の権衡を得んと欲せは須く農産を起すへし」という論文も投稿した。輸出入の不均衡と金銀貨の海外への流出を西洋文明の導入に伴うやむを得ない事情と認め、日本人は経験が浅い工業生産よりも、知識と資財の土台がすでにできている農業のほうが、泰西の方法をもって改良し進歩させれば興隆しやすく、このようにして農産物の輸出増加をもたらすことができたら、貿易の権衡を得るための第一歩にもなると主張している（第二六号、一八八一年四月、六丁裏～一二丁裏）。

もちろん農業の近代化と言っても、札幌農学校生にとつてもつとも身近な課題は北海道の開拓であった。佐藤昌介はこれに関して「渡島地方開拓総論」という、『農業叢談』の六号にもわたる長文を書いた。渡島地方の利害を計較したうえで、開拓事業を勧め、その可能性を検討している。ここでその内容をより詳細に紹介することは省くが、未開地を「富強文明」にする亀鑑としてアメリカの事例を挙げていることだけは記しておきたい（第七号、一八八〇年七月、九丁裏～一〇丁表）。北海道をどう開拓していくべきかの問

題について考える際、農学校で修めた学問はもとより、生徒が実際に札幌で送っていた生活の習慣も参考になったと思われる。例えば、校内の生活が衣食住まで西洋化されていたのは前にも述べた通りだが、内村鑑三は「米の滋養分」という論文で、寒い北海道の住人にとってあまり養分に富まない米よりも麦や玉蜀黍のほうが適当な常食であると説き(第二号、一〇丁裏―二二丁裏)、第三期生の原田成貞も「小麦培養法」という文章を投稿し、これはアメリカの農書からの邦訳だが、翻訳者の原田は、寒い北海道の住人は米の代わりに小麦から作られたパンを食べたほうが良いと主張している(第五号、一八八〇年五月、三丁表)。

そのほか、西洋の農業方法を紹介する記事がいくつかある。例えば、第三期生の伊吹鎗造による「牧場」と題する論文は牧場にする場所を選ぶときの注意点や牧草の種子の選択、肥料の施用などについて述べているが、欧米で採用される方法にも触れており(同前、七丁裏―一〇丁表、人糞を使った肥料の効用や製法について論じる第三期生の杉山清利が書いた「人糞」という論文にも、欧米人の言を引用し、その方法の導入を勧める箇所がある(第九号、一八八〇年九月、二丁表―七丁表)。また、梅野四男吉の筆になる「農業七則」という文章は西洋の農書からとった七つの農家が必ず守るべき規則を挙げて説明しており(第一七号、一八

八一年五月、一丁表―五丁表)、アメリカでよく採用されていると言われるキャベツの貯蔵方法を紹介する無署名の小文もある(「カッページ」を貯ふる法」第五号、二二丁裏)。これら以外にもさまざま欧米の事情に触れるテキストがある。

以上、『農業叢談』のいくつかの記事を選択し要約してみたが、先に紹介したペンハローの雑誌発行の予定はほぼ彼の希望通りに実現されたとみてよからう。文明論の観点から雑誌全体の分析の結果をまとめれば、約半分の記事は欧米人の言を引用したり、その試験結果を挙げたり、欧米の農業の方法や法令などの事情に触れたり、洋書を直接訳したりするような形で、西洋の権威を借りながら新知識の普及に努めている。特に引用文と翻訳文に関して言えば、名前など出典の情報を示す場合もあるが、「或る西洋人の言に」「西人の語に」「西洋人の説に」「西洋に有名なる農家」「米国(の)農書」「西洋農書中」「二三の洋書」のような曖昧な表示もなされている。これらは読者のために情報源を探しやすくすることが目的でないの言うまでもなく、いわゆる西洋の知識を基にすることによって自分の主張の信頼性を高めようとしているのである。このようにして、『農業叢談』の執筆者たちは欧米諸国の学問的な権威を認め、進んだ学問を西洋の優越性の一理由とする文明論を再生産することにもなった。

すでに述べたように、内村鑑三も「米の滋養分」という一本の論文を『農業叢談』に投稿し、同誌の多くの論文と同様、彼も札幌農学校で学んだ学問を基にし、「西洋人の説」を引用したのである。内村がこの西洋の権威を借りるといった論じ方をよく体得していたことは、彼が卒業後技官として漁業について書いた文章からも分かる。そのなかでも彼は欧米の先行研究を援用し、その調査方法を借り、同諸国の事情を紹介して手本としているのである。³⁶⁾

四 農学校生の「文明」意識——内村鑑三の場合

ここまで紹介した環境下で教育を受けた内村鑑三は思想的にどのような影響を受けたのだろうか。本人は後にその経験を次のようなストーリーにまとめる。当初は自分の愛国心と相容れないように思われた外来宗教であるキリスト教に反感を感じたが、周りの同期生たちが続々と入信してしまっただけでもあり、結局自分も嫌々ながらキリスト教徒の先輩による伝道に屈した形で入信した。続いて、英語を媒介とした勉強により、アメリカ合衆国とキリスト教文明(Christian civilization)に対する崇敬の念が養われ、アメリカの金力万能や人種差別などの問題を耳にしながらも、それを信じなかった。この見方が変わったのは一八八四年に初

めて渡米したときである。アメリカ滞在中に西洋文明の現実に直面して幻滅した。渡米以前には欧米を優越者と考え、日本を神に見放された無用の国と思っていたのと違い、アメリカの現実を目の当たりにしつつ自国を遠くから見るとにより、日本もまた神の意思に従って世界人類に貢献する天職を持っていることを悟ったという。³⁷⁾

内村は札幌の地で、欧米中心主義的文明論に圧倒されてしまったとみて間違いないだろう。それと格闘し、それに挑戦しようと、彼は後に「日本の天職」を唱えるが、この天職思想への決定的な刺激を与えられたのがアメリカのアマースト大学在学中であったことは、内村が残した書簡や日記から十分に明らかになる事実である。³⁸⁾しかし、札幌での経験によって愛国心が失われ、渡米するまで愛国心を抱くことはなかったとは思われない。

農学校で内村の同期生であった太田(新渡戸)稲造の回想によれば、卒業のころ内村と太田と宮部金吾の三人は互いに、社会に出たら「国と同胞の為に一身を捧げる旨を述べ合」³⁹⁾ったというから、札幌での教育を経て相変わらず国と国民のことを大切に思っていたようである。それは三人に限ったことではなかった。一八七六年に開識社という学生サークルが設立され、文書力と弁舌能力の向上を目的に社員が集会して演説と討論をした。内村鑑三も入学直後

の一八七七年一〇月より二年にわたって開識社に携わり、七九年一〇月に日課の多忙を理由として退社した^⑩。設立時の開識社規則は英語で書かれたが、一八八〇年の新入生のために同社で活動している生徒は規則を日本語で再編集し、冒頭に以下の緒言を置いた。

国之開明ハ大ヒニ民人独行自立之精神ニ由ル。而シテ民人独行自立之精神ハ文芸學術之進歩ヲ以テ振起ス。惟ルニ我国ハ王政復古之後、前代未ダ曾テアラズ、他国未ダ嘗テ有ラザルノ一大進歩ヲ經、教育殆ンド其法ヲ得、法律稍其衡ヲ得、其他百般之事亦略々其緒ニ就ケリ、夫レ開明之度ハ已ニコ、ニ達セリ。然レドモ其未ダ以テ富強ヲ欧米ト頡頏スル能ハザルヤ遠シ。噫々コレ何ノ故ゾヤ。多言ヲ要セズ、識見ニ乏シケレバナリ。故ニ吾人ハ茲ニ此社ヲ結び、以テ吾人ガ天賦之性ヲ琢キ、以テ吾人ガ学見知識ヲ広フシ、以テ吾人ヲシテ明治之聖代ニ愧ヂザルノ忠臣タラシメント欲スト云爾。(六七四頁)

さらに「開識社記録」で挙げられている演説題名のなかには、“Patriotism is the basis of national independence” “Love of the country” “Importance of Jap. Spirit” “Importance of Jap. Spirit as to intercourse to foreigners” “People who are destitute of the Love of Country” “A

man is said to be perfect who possesses equally passion, perseverance & patriotic mind” 「愛国心」などがある。“Patriotic mind is the basis of national prosperity”をテーマとした討論も記録されている(六四七頁、六五〇～六五一頁、六八〇頁)。内村も“The independence of a country is based upon the boldness of its people”と“Rise & Progress of the nation”について演説した(六四九頁、六五二頁)。これらの具体的な内容は残念ながら不明だが、要旨ないし原稿が残っている演説もあり、彼らの愛国心を窺い知ることができる。

例えば、第一期生の出田晴太郎は農業が大いに国富の助けになり、農学校生こそ日本帝国を豊かにすべきだと演述し(六三九頁)、第四期生の中川太郎も「時難ヲ救フハ一ニ諸君ノ任ニアリ」という演説で、紙幣の下落を方今の最大の問題とし、解決方法として国産の増加を挙げているが、工業には文明が進み貿易が盛んになる必要があることから、まずは農産を増やすべきだと説き、それが農学校生の任務だと論じている(六七七～六七九頁)。また、伊吹鎗造は「外国ノ侮慢ヲ防クハ果シテ書生ノ任ナル哉」という題の下で、国勢が愛国心の深浅によると言い、愛国心のある士族子弟が我国勢を振起し外侮を防ぐ期待を表しているが、そのために兵力ではなく、知識・才力が必要であり、農学

校生こそこの課題を担うべきだと呼び掛けている（六六五～六六六頁）。第四期生の黒宮武雄の「愛国論」という演説もその題名に適合した熱情を込めたものであったことは記録から感じ取られる（六八〇～六八一頁）。最後にここで取り上げたいのは第三期生の中根明による「今ノ壮年輩ハ精神気力ヲ振起セザルベカラズ」と題する演説の要旨であり、それほど長くないので、全文を引用することにしよう。

我輩少壮学生ノ今日孳々強勉以テ学業ニ追従スルハ一身一己ノ私利ヲ謀ルヲ以テ一片ノ目途、單純ノ期望トナスニ非ザルナリ。マタ將ニ愛國ノ赤心ニ基キ、社会ノ鴻福ヲ旨トシ、意ヲ事々物々ニ注ギ、力ヲ千状万態ニ効シ、以テ我帝国ヲシテ開明域ニ進マシメントスルニアルノミ。○我輩ハ一事ヲ勤メ、一業ヲナスモ、帝国現今ノ実況ヲ熟察シテ其最モ急ナル者ニ就カザル可カラズ。○当今ノ急務ハ物産ヲ興シ、製造ヲ盛ニスルニアリ、マタ雇外国人ヲ退クルニアリ、我輩少壮生カ孳々強勉シテ早く学士トナリ、雇外国人ヲ退クルハ最モヨシ、何ソウタカウニ足ランヤ（？）○マタ此大事業ヲナス農学、建築学、鉱山学等ヲ修ムルニアリ。○当今壮年輩ノ実況、此輩ノ気力ニ乏シキコト其例。○精心気力ヲ振起セザル可カラズ其用其例ノ嗚呼。○今ノ壮年輩ヨ、只字ヲ知り、事ヲ誦スルヲ以テ足レリトナサズシ

テ、願クバ精神気力ヲ振起シ、実学ヲ修メ、其活用ヲナサンコトヲ。之レットメ以テ我帝国ヲ真正ノ文明開化ノ域ニ進メ、我独立ノ国旗ヲシテ世界万国ニ照臨セシメヨ。（六七五～六七六頁。／は改行を示す）

以上の演説・討論はすべて内村が札幌農学校を卒業する前までになされたものであり、開社規則の緒言と合わせて、当時の生徒たちが一般に、日本がまだ十分に文明国になつていないことを意識しながら愛国心を抱き、日本の開化を進める責任感も有していた傍証になる。

おわりに——欧米中心主義的文明論の行方

本稿では内村鑑三の思想形成と関連させて、札幌農学校における文明論の分析を行なった。米国出身者を中心とする開拓使のお雇外国人は自国が日本より進歩しているという意識を持ち、農学校生も授業や卒業式でこうした文明観に接することになったことは、教師が残した報告書・書簡・スピーチの草稿や生徒の受講ノート、教科書、試験問題などの史料分析から明らかになった。また、農学校の生徒が文明論の受け手のみならず、『農業叢談』という同校が発行する雑誌を媒体として早くも在学中に送り手にもなったことが分かった。この文明論は要するに欧米中心主義

の文脈のなかにあったが、内村鑑三はそれによって欧米を崇敬するようになったと思われる。

崇敬の対象となった西洋文明を内村自身が「キリスト教文明」と呼称したことから、やはり彼にとっては西洋文明とキリスト教が緊密に結びついており、したがって入信の経験が欧米中心主義的文明論との出会いの肝要な一部分だったと考えられる。従来、内村の思想形成のうえで札幌農学校における重要な出来事として入信が注目されてきており、その重要性を疑う余地もないように思われるが、本稿ではより大きな視野に立って文明論の問題を中心に内村の思想形成の場としての札幌農学校について考えてみた。

内村が一八九〇年代前半期に人類文明にかかわる「日本の天職」を唱えたのは、本稿で分析したような欧米中心主義的文明論への異議申し立てと理解してよからう。ただし、「文明」や「進歩」の概念を、日本人が自信を持てるようなナショナルスティックなものへと改めながらも、基本的には欧米中心主義的文明論の言語的背景から脱却しなかつたと思われる。同じ文明論と天職論の論理を保ち続け、日清戦争を「義戦」として正当化するようになる⁽¹⁾。その展開の検討を次の課題としたい。

注

(1) スキナーの思想史研究のアプローチについては論文集 *Tully, James, ed. Meaning and Context. Quentin Skinner and his Critics*. Princeton (New Jersey): Princeton University Press, 1988 を参照。

(2) 明治日本にも導入されたバックルの英国開化史もそうだし、例えば、内村鑑三が参考にした Guyot, Arnold. *Earth and Man: Lectures on Comparative Physical Geography, in its Relation to the History of Mankind* (Translated from the French, by C. C. Felton). Boston: Gould, Kendall, and Lincoln, 1849 & Drummond, Henry. *Tropical Africa*. Authorised Edition with Six Maps, and Illustrations. New York: Scribner and Welford, 1888 をうかがう。

(3) 松沢弘陽「文明論における「始造」と「独立」——『文明論之概略』とその前後」一・二(『北大法学論集』第三一巻第三・四合併号下巻)第三三巻第三号、一九八一〜八二年)。

(4) 河野有理『明六雑誌の政治思想——阪谷素と「道理」の挑戦』(東京大学出版会、二〇一一年)。

(5) 大久保健晴『近代日本の政治構想とオランダ』(東京大学出版会、二〇一〇年)。

(6) 内村鑑三の札幌農学校時代前後の履歴については鈴木

俊郎『内村鑑三伝——米國留学まで』（岩波書店、一九八六年）と鈴木範久『内村鑑三日録——1861-1888——青年の旅』（教文館、一九九八年）が詳しい。また、内村についての最近の研究として、柴田真希都『明治知識人としての内村鑑三——その批判精神と普遍主義の展開』（みすず書房、二〇一六年）、役重善洋『近代日本の植民地主義とジェンタイル・シオニズム——内村鑑三・矢内原忠雄・中田重治におけるナシヨナリズムと世界認識』（インパクト出版会、二〇一八年）、新保祐司『明治の光 内村鑑三』（藤原書店、二〇一八年）、関根清三『内村鑑三——その聖書読解と危機の時代』（筑摩選書、二〇一九年）、今高義也『内村鑑三の世界像——伝統・信仰・詩歌』（ぺりかん社、二〇二〇年）などがある。

(7) 鈴木『内村鑑三日録』六五～六六頁。

(8) Kaitakushi, ed. *Second Annual Report of Sapporo Agricultural College*, Sapporo: Hokkaidō daigaku tosho kankokai, 1976 (1878), p. 11 / 開拓使編『札幌農学校第二年报』（北海道大学図書刊行会、一九七六年覆刻）一五頁。

(9) *Ibid.*, pp. 12-14 / 同前、一六～一九頁。

(10) ウィリアム・ホイラー「一八八四年五月一〇日鈴木大亮宛の書簡」〔北海道大学附属図書館、開拓使外国人関係書簡、Wheeler, William 098〕。

(11) 「入学試験及び聖書三〇冊入手等の件」一八七六年

（北海道大学編『北大百年史 札幌農学校史料（一）』ぎょうせい、一九八一年。以下「史料（一）」と略記）二二三～二二四頁。

(12) 「農学校における聖書使用の許可」一八七六年（『史料（一）』二六六頁）。

(13) クラークが農学校生に対するキリスト教の伝道に努めたのはよく知られているが、同時に西洋文明を「東洋人」に教えているという西洋人教師としての自己理解もあったことは想像にかたくない。クラークと第一期生の一入として彼の下で勉強した内田澗は後にも手紙のやりとりを続けたが、その一通でクラークは、日本を訪問して日本国民のキリスト教と西洋文明における進歩を見たいと書いている（ウィリアム・スミス・クラーク「一八八〇年一〇月九日内田澗宛の書簡」北海道博物館、収蔵番号 117846）。

(14) 一八七三年の「仮学校則例」では五年間の奉職義務となくしてゐる（『史料（一）』八九頁）。

(15) 「仮学校生徒の卒業後奉職義務廃止に付申入」一八七四年（『史料（一）』一四六～一四七頁）。

(16) 同前、一四七～一四八頁。

(17) 「第一回卒業式の状況」一八八〇年（『史料（一）』五一～五二頁）。

(18) ウィリアム・ベン・ブルックス「札幌農学校卒業生への送別の辞（草稿）」一八八八年（北海道大学附属図書

館、開拓使外国人関係書簡、Brooks, William P. 169)。

- (19) 佐藤昌介「Lectures on Agriculture By Prof. W. P. Brooks」一八七七年(北海道大学文学書館「受講ノート」00002)二一―六頁、南鷹次郎「Lectures on Agriculture by William P. Brooks, B. S. Professor of Agriculture. Volume I」一八七七年(北海道大学文学書館「受講ノート」00008)三―六頁、中根明「Lectures on Agriculture by Prof. Wm P. Brooks」一八七八年(北海道大学文学書館「受講ノート」複製00051)四―八頁。

- (20) Kaitakushi, ed. *Fourth Annual Report of the Sapporo Agricultural College, Japan. For 1879-1880*, Sapporo: Hokkaidō daigaku tosho kankōkai, 1976 (1880), pp. 37-39.
- (21) 内田謙「Lectures on History By Prof. Cutter」一八七八年(北海道博物館、収蔵番号 117527)二頁。なお、この受講ノートを全部撮影し、そのまま研究書に載せたものとして、松沢真子『札幌農学校の忘れられたさきかけ——リベラル・アーツと実業教育』(北海道出版企画センター、二〇〇五年)がある。
- (22) 内田「Lectures on History」三三三頁。
- (23) 同前、一七頁。
- (24) 同前、五二頁。
- (25) Kaitakushi, ed. *Fourth Annual Report*, p. 98. なお、山本美穂子・井上高聡「受講ノート——札幌農学校生の学業

記録」(『北海道大学文学書館年報』第四号、二〇〇九年)という資料目録があるが、「文明史」の授業に関する記載はない。

- (26) 内村鑑三が第四年級生になったのは、その次の年度のことである。彼も歴史の授業を受けたことは成績表から明らかになるが、カッターは『札幌農学校第五年報』において、その年に彼の担当する学科の授業に変更があったことを報告しており、歴史授業の科目名としては「Modern History」しか見つからないし、試験問題も『年報』に掲載されていないため、歴史授業が前年度と同じ内容だったかどうか、もし異なっていたとすれば、どのように変わったのかは不明である (Kaitakushi, ed. *Fifth Annual Report of Sapporo Agricultural College, Japan*, Sapporo: Hokkaidō daigaku tosho kankōkai, 1976 (1881), pp. 23 & 57)。ちなみに、一八七八年一月二四日から起業した第二期日課表によれば、ペンハローは予科一級において「開化史」の授業を行なったようであり(第二期授業時間割提出の件)一八七八年(『史料(一)』三三二頁)、また、一八七九―八〇年の予科教授次序を見ると、宮崎道正は一級生向けの授業のなか「文明史」を担当したことが分かる(第二期授業時間割提出の件)一八八〇年、『史料(一)』四六八―四六九頁)。ただし、内村鑑三は予科の授業を受けたことがない。

- (27) Katakushi, ed. *Fifth Annual Report*, p. 35.
- (28) Katakushi, ed. *Second Annual Report*, p. 130.
- (29) Lord, John. *Modern Europe. A School History* (A new edition, with three additional chapters, comprehending all the leading events which have occurred from the Congress of Vienna, in 1815, to the Peace of Villafranca, in 1859). London: Simpkin, Marshall, & Co., 1875, p. 8.
- (30) *Ibid.*, pp. 4-5.
- (31) 内村鑑三『流竄録』一八九四〜九五年(鈴木俊郎他編『内村鑑三全集』第三卷、岩波書店、一九八二年。以下『全集』と略記) 八二頁。
- (32) 「農学校報告書刊行の伺」一八七八年(『史料(一)』三七八〜三七九頁(引用文には適宜句読点を付した。以下同)。なお、札幌農学校編『札幌農学校報告書』第五号(一八七九年四月)の「緒言」にもこう書いてある。「札幌農学校ノ此報告ヲ発兌スルヤ、其意北海道ノ農家及ヒ百工ヲ利セント欲スルニ在リ。蓋シ本校開業以來茲ニ二年ノ日月ヲ經過スト雖トモ、其教育ノ結果ハ尚ホ更ニ二年ノ後ニ非レハ、之ヲ見ルコト能ハス。且ツ其北海道農家ヲ益スルノ事業ニ於テモ之ヲ知ルモノ甚タ鮮ナキカ如トシ。故ニ今本校ニ於テ講究スル所ニシテ農業本艸獣医ノ諸科ヲ首メトシ、凡ソ民間ニ裨益アルノ条件ハ逐号之ヲ採録シ、或ハ之ヲ外国新報ヨリ抄訳シ、毎月之ヲ刊行シテ、本道人民ニ公告シ、以テ其知識ヲ開達スルノ一端ト為シ、其本校トノ關係ヲシテ倍々親密ナラシメ、建校ノ挙実ニ民益ヲ謀ルニ出ツルヲ知ラシメント欲スト云爾」(表紙裏)。
- (33) 井川洌「農業叢談刊行の旨意」(『農業叢談』第一号、一八八〇年一月)一丁表(以下、同誌からの引用を本文中に略記)。
- (34) 第一八号を限りに、すでに同一の目的を持つほかの紙誌が出ていることを理由として『農業叢談』は停刊された(『農業叢談停刊の旨上申』一八八一年(『史料(一)』五六〇〜五六一頁)。なお、『農業叢談』に改題以前の『札幌農学校報告書』は、北海道大学文学書館が第五号しか所蔵しておらず、それ以外の残存は確認できていない)。
- (35) 梅野「種子を薄く蒔くべき事」五丁表裏、佐藤昌介「肥培の緊要なるを論ず」(第二号)一〇丁表、内村「米の滋養分」一二丁表、原田「小麦培養法」三丁表、尾泉良太郎「植物に適せる土質」(第六号、一八八〇年六月)四丁裏、梅野「農業七則」五丁表、杉山清利「球葱耕作法」(第一号)四丁表、原田成貞「玉蜀黍」(第一号、一八八〇年一月)七丁裏。
- (36) 内村鑑三「北海道鱈漁業の景況」一八八二年(『全集』第一卷、一九八一年)一〇頁、内村鑑三「漁業ト気象学ノ關係」一八八四年(同前)三七〜三九頁と六一頁、内村鑑三「鱈魚人工孵化法」一八八四年(同前)六二頁、内村鑑

三「石狩川鮭魚減少ノ源因」一八八四年（同前）六八頁と
七二頁、内村鑑三「漁業ト鉄道ノ關係」一八八四年（同
前）九二〜九九頁。

(37) Uchimura Kanzō. *How I Became a Christian: Out of My Diary*. In Yamamoto Taijirō and Mutō Yōichi, eds. *The Complete Works of Kanzō Uchimura*, Vol. 1. Tokyo: Kyōbunkan, 1971 (1895), pp. 24-32 & 105-122.

（筑波大学大学院）

(38) 内村鑑三「一八九二年一月一六日 Julius Hawley Seelye 宛の書簡」、『全集』第三六卷、一九八三年）三
五二〜三五三頁、内村鑑三「一九一九年日記」、『全集』
第三三卷、一九八三年）一一三三頁。

(39) 新渡戸稲造「旧友内村鑑三氏を偲ぶ」一九三〇年（新
渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集』第四卷、教
文館、一九六九年）五五九頁。

(40) 「開識社記録」（北海道大学編『北大百年史 札幌農学
校史料（二）』ぎょうせい、一九八一年）六三二〜六三三
頁、六四六頁、六六八頁（以下は「開識社記録」からの引
用は本文中に略記）。開識社については亀井秀雄「開識社
の研究」（北海道大学編『北大百年史 通説』ぎょうせ
い、一九八二年）も参照。

(41) Uchimura Kanzō. "Justification for the Korean War."
In *The Japan Weekly Mail* (Aug. 11, 1894) 内村鑑三「日
清戦争の義」（『国民之友』第二三四号、一八九四年九月三

日）、内村鑑三「日清戦争の目的如何」（『国民之友』第二
三七号、一八九四年一〇月三日）、内村鑑三「世界歴史に
徴して日支の關係を論ず」（『国民新聞』一八九四年七月二
七日）。